

あいさつ文

みなさん今日一日お疲れ様でした。学会を代表してご挨拶させていただければと思います。年次学術大会は毎年実行委員会に企画をお願いしておりますが、今年は東京工業大学の橋本実行委員長をはじめとする実行委員の皆さまに、企画・準備等の労をおとりいただきました。まことにありがとうございます。また研究発表の座長を務めていただいた方々、シンポジウムおよびセッションでご登壇いただいた方々にも、様々なご協力をいただいたこと心より御礼申し上げます。そして今年も日本弁理士会様には協賛セッションの開催をはじめとして、特別協賛団体として多大なご支援をいただきました。ありがとうございました。そして今年に加えて株式会社みらい創造機構様にご協賛いただいております。ありがとうございました。工業所有権情報・研修館（INPIT）および日本知的財産協会（JIPA）様に、ご後援をいただいております。まことにありがとうございます。

さて今年の会場はここ東京工業大学で開催させていただきました。会場のご提供をいただきまことにたいし、益学長はじめ関係者の皆様には心から御礼申し上げます。実は東工大での開催は2003年、2009年につづいて今回が3回目となります。今年の大会テーマは「先端技術と知財戦略 -令和新時代の知財戦略の方向性を見極める」ということですが、2003年は「国際的視野に立った知的財産」この年の3月に施行された知財基本法の熱気のさなかでの開催でした。その立法の中心人物であった保岡興治氏（衆議院議員・自民党司法制度調査会会長・元法務大臣）、今年残念ながら逝去されましたが、そのときお忙しい中学会にお越しになられ、知財司法改革についてはかなり踏み込んだ発言をされていたのを思い出します。そして2009年は「今あるべき知的財産戦略－環境パラダイムへの対応とバランスに向けて－」という、バランスという言葉が出てくるわけです。このころ日本の特許出願がピークアウトして、中国の出願が急増を始め、基本法の当時のスタンスの修正が求められていたなかでのバランスという表現だったのかもしれませんが。さてそれから10年が経ちました。今我々はどのような局面に立っているのか、この16年前、10年前の学会のテーマや議論をみると改めて認識することができます。

ひとつは国際情勢の変化です。そもそも知財基本法も国際情勢、すなわち米国との相克の時代から中国の台頭への備えのなかで日本の知財保護強化が必然的に政策として取り上げられるようになった経緯があります。そののちも国際的環境は「知財を窃盗するものと守るものとの闘い」ととらえるか、「イノベーションをおこすパートナー」ととらえるか、米国でもその知財政策の振れ幅は大きく、今はご案内のように前者のスタンスが強く、米中対立を引き起こす最大の要因となっていると言えると思います。一方その中国も知財戦略を量から質へ転換させることを今年明らかにしています。この先中国の出願数は数年で減少に向かうことも予想されます。日本の知財政策での視点は、米国との競争、そしてその後は中国との競争としてとらえることが多かったと思いますが、知識や技術のデカップリングを想定するとき、単純な競争を念頭に置いただけの政策ではなく、より戦略的なものが求められていることが明らかです。

そして2番目の観点として、SDG sはこの数年、産業に大きな影響を及ぼすようになりました。まず投資の分野にSDG s、ESGが入ってきて、今やスタートアップにはこの観点から外れるところには資金が集まらなくなっています。知財はまさしく投資ですから、知財学会としてもこのSDG s ESGは最重要なテーマであると思います。

そして今日のシンポジウムセッションでも話題になったデジタルトランスフォーメーションでしょう。パネルでも申し上げましたが、産業構造のデジタルトランスフォーメーションに伴って、知財の範囲もその活用の仕方も大きな変化を余儀なくされます。そこにはいい未来だけでなく一見避けたいような悪い未来も含まれているように思います。でもそれを変えていくことができるとするとそれも技術や社会システム、そしてそれを実現する人間の考えであり、そのアイデアは知財そのものです。忘れてはならないことは未来の悪い姿を恐れるだけでなく、よい未来を信じて、そこに必要な知財を生み出していくことであるかと思えます。

実は今東大では東京フォーラムというイベントが行われていまして、昨日その会場でソフトバンクの孫社長とアリババの創業者ジャックマーとの対談がありました。NHKをはじめ主要メディアにも紹介されていますが、ちょうど日本の知財基本法制定の当時、初めて二人があつた話をしていたようです。「あのときはジャックの会社は小さかったんだよ、でも初めて会った時、カネがほしいとは一切言わなかったんだ。未来や哲学について語り、その姿を見て出資を決断した」というような話です。

それから 2019 年になり AI とデータの時代になって日本は苦戦しています。実はその対談の後、東大とソフトバンクで、10 年 200 億で研究所を作るという発表をしたわけですが、その狙いはまさしく「若い人たちにも AI を学ぶ機会を増やし、起業するチャンスを与えていきたい」というものです。そういう活動をささえるには、今日のシンポジウムのテーマとなったデジタル知財のマネジメントが重要になります。我々もそのような未来に備えてしっかり人材育成に取り組まないといけません。今日もそのような意味で学生発表の部を設けて、優秀な発表をした学生を表彰し、知的財産研究を担う若い世代の育成をしています。これらの活動をデジタル時代にふさわしいものにするにはどうしたらよいか、そういうことを考えていくことが、私たちの宿題であると思っています。宿題は少なくないのですが、令和時代にふさわしい学会活動に積極的に取り組んでまいりますので、学会員の皆様には引き続き学会の活動にご協力をお願いしたく存じます。

最後少しお知らせをさせていただきます。来年 2 月 14 日（金）に政策研究大学院大学にて、日本弁理士会と共催で、インターネット上の模倣品対策をテーマにした国際シンポジウムを開催予定です。詳細は決まり次第、学会 WEB サイトに掲載するとともに、会員の皆さまには電子メールでご案内をお送りいたします。それではちょっと長くなってすみませんがこれであいさつを終わらせていただきます。